

御木本幸吉の二宮尊徳顕彰

飯 森 富 夫

目 次

はじめに

一 御木本幸吉の略歴

二 御木本幸吉と報徳運動

(一) 二宮尊徳との「出会い」

(二) 中央報徳会との関わり

三 御木本幸吉の尊徳生誕地整備

四 御木本幸吉以後の尊徳生誕地・道標
おわりに

キーワード

栢山村 斯民 三重県斯民会 服部北溟
東海道線松田駅

はじめに

御木本幸吉（一八五八～一九五四）といえば、多くの人が「真珠王」という呼称を思い浮かべるのではないだろうか。三重県英虞湾内で苦心の末、真円真珠の養殖に成功し、世界中に「ミキモト・パール」を知らしめた実業家として有名である。

ところで、神奈川県小田原市栢山に二宮尊徳（一七八七～一八五六）の生家が現存していることを知る人も多いであろう。その生家と敷地が今のように整備されるきっかけを作った人物こそ御木本幸吉なのである。志摩の海で真珠の養殖に努力した御木本が、主に北関東で農村復興に努めた尊徳の遺跡の整備に携わった理由を近代の報徳運動の歴史とからめて追ってみた。

一 御木本幸吉の略歴

まず、御木本幸吉の生涯を略述したい。安政五年（一八五八）一月二五日志摩国鳥羽町（現三重県鳥羽市）のうどん屋「阿波幸」の長男（六男三女）として誕生（幼名・吉松）。一三歳の頃、家業の手伝いのほかに青物の行商を始める。一八七八年（明治一一）二〇歳で家督相続、幸吉と改名。東京・横浜などを見学し、海産物が貿易の対象になること、特に真珠が高値で売れることを目の当たりにする。二三歳で三重県勧業委員に、二八歳で志摩国海産物改良組合理事に就任。一八九〇年（明治二三）三二歳、東京上野の第三回内国勧業博覧会において帝大教授で動物学者の

箕作佳吉を知り、その指導を受け、養殖真珠の実験に着手し、一八九三年（明治二六）七月一日、半円真珠の養殖に成功する。一〇月、英虞湾田徳島（後に多徳島と改称）に御木本真珠養殖場を創設した（三五歳）。一八九九年（明治三二）四一歳、東京銀座に出店し、真珠の専門販売を開始する。一九〇八年（明治四一）五〇歳、真円真珠養殖法の特許を取得した。

一九一三年（大正二）に大阪支店、一九二二年（大正一一）に帝国ホテルアーケードに直営店を開設し、一九三一年（昭和六）には大阪支店を閉鎖して神戸支店を開設した。

海外では、一九一三年（大正二）のロンドン卸売支店を皮切りに、一九三七年（昭和一二）までに、上海、ニューヨーク、パリ、ボンベイ、ロサンゼルス、シカゴ、サンフランシスコなどに支店を開設している。

ところが、一九三七年（昭和一二）に始まった日中戦争の長期化にともない、一九四〇年（昭和一五）七月七日、奢侈品等製造販売制限規則が施行された。このため、真珠の生産・営業は困難となり、さらに一九四一年（昭和一六）一二月八日の太平洋戦争開戦により、海外支店を閉鎖、国内での事業規模も縮小せざるを得なくなった。そういう中において一九四三年（昭和一八）、御木本は真珠の薬品化の特許を取得する（カルシウム製法、結核療養剤）が、その後、鳥羽の工場は軍用となり、東京の本店や工場は米軍の空襲で焼失する。

戦後、一九四六年（昭和二一）御木本は米軍中央購買所と真珠の指定納入契約を結ぶ。これは、戦前から海外支店を通じて、ミキモト・パールが国外で知られていたためであった。一九四八年（昭和二三）からは連合軍将兵の幸吉訪問、真珠養殖場見学の回数が増大し、アメリカの新聞・雑誌に記事が盛んに載るようになる。一九五一年（昭和二六）占領軍に接収されていた横浜のホテルニューグランドに売店が、翌年には日本人向けに新宿伊勢丹に委託店が開設された。一九五四年（昭和二九）九月二日、胆石と老衰のため、鳥羽の自宅で死去。九六歳であった。その功績

に対し、正四位勲一等瑞宝章を授けられた。¹⁾

二 御木本幸吉と報徳運動

(一) 二宮尊徳との「出会い」

二宮金次郎は天明の飢饉の最中の天明七年（一七八七）七月三日、小田原藩領相模国足柄上郡栢山村（現神奈川県小田原市）に生まれる。一四歳で父、一六歳で母を亡くした金次郎は二人の弟と別れ、伯父万兵衛の家に引き取られる。二〇歳で生家跡に小屋を建て、独立の準備をした金次郎は徐々に田畑を増やし、小田原城下に入りをする中で、藩家老服部十郎兵衛家に住み込み、やがて同家の財政再建を任される。金次郎の活躍を聞いた藩主大久保忠真は分家の宇津氏の所領桜町（現栃木県真岡市）の建て直しを金次郎に命令。三六歳、金次郎は栢山の家・田畑などを処分して、妻・長男とともに桜町へ赴任。金次郎による村の建て直しは北関東を中心に約六〇〇か村に及ぶといわれている。五六歳、金次郎は幕府の役人に取り立てられ、武士としての名乗りを「尊徳」とした。五八〜六〇歳、日光神領仕法雛形を作成。六七歳で仕法開始を命じられ、日光へ赴任。安政三年（一八五六）一〇月二〇日、今市（現栃木県日光市）にて七〇歳で没した。

尊徳没後、門人をはじめ、関係者・団体が尊徳の教えの継承・実践をさまざまに試みるが、これを報徳運動と呼んでいる。

御木本が尊徳のことを知るようになったきっかけについては諸説がある。まずは、一八七八年（明治一一）東京見学の折、日光へも立ち寄り、今市にて尊徳のことを聞いて感銘を受け、以後、尊徳の言動をまとめた『二宮翁夜話』

などを読んで、自らを「伊勢の二宮金次郎」と称するようになったとする説がある⁽²⁾。また、一八九二年（明治二五）一二月、知人から入手した尊徳の伝記『報徳記』を読んで感銘し、自分も「海の金次郎」になってみせると決心したとする説や、一八九九年（明治三二）に東京銀座に真珠店を出した後、たまたま書店で尊徳に関する書籍を買ったとする説もある⁽³⁾。いずれにしても、尊徳の業績や教えに感銘を受けた御木本は、自身を尊徳になぞらえようとしたというこのようである。

ちなみに、『報徳記』は相馬中村藩士で尊徳の高弟、娘婿でもある富田高慶が尊徳の亡くなった直後に書き始め、その浄書版を一八八〇年（明治一三）に旧相馬藩主相馬充胤が天皇へ献上。天皇の指示により、全国の知事以上の者に読ませるため、一八八三年（明治一六）宮内省版が、一八八五年（明治一八）には広く官吏に読ませるため、農商務省版が刊行された。さらに一八九〇年（明治二三）一般向けに大日本農会版が刊行され⁽⁴⁾、一九三三年（昭和八）には岩波文庫版が刊行された。御木本が知人から入手したという『報徳記』は大日本農会版であろう。

『二宮翁夜話』は片岡村（現神奈川県平塚市）の名主大沢家の出身で、箱根湯本（現神奈川県足柄下郡箱根町）の福住家（萬翠楼福住）を継いだ、尊徳の高弟のひとり福住正兄の著作で、一八八四年（明治一七）以来、今日まで実にいろいろな形で刊行され続けている⁽⁵⁾。一九三三年（昭和八）には岩波文庫版が刊行された。

（二）中央報徳会との関わり

一九〇五年（明治三八）日露戦争が終わるが、ほぼ一年半の戦費一七億二〇〇〇万円は明治三十七年度一般会計二億七七〇〇万円の六・二倍に達した⁽⁶⁾。内務省は財政難、寄生地主制の進展などに直面していた農村の建て直し（担税力の養成、強兵の育成など）を画策し、そのために報徳社・青年会・産業組合を利用することとした。そして、内務省

内に事務局を置く半官半民の団体「報徳会」が一九〇五年一月に設立され、翌年の四月には機関誌『斯民』が創刊されたのである。同会は一九一二年（大正元）、「中央報徳会」と改称される。⁽⁷⁾

以下は『斯民』の記事に見える御木本と（中央）報徳会との関係である。

一九〇八年（明治四一）一〇月下旬、内務大臣平田東助と内務省神社局長井上友一が伊勢神宮を参拝した。これは同月一三日に戊申詔書が發布されたことと関連する行動であろう。戊申詔書は、皇室を中心として人々が一体となり、勤勉・儉約・生業に励むことを国民に求めるもので、教育勅語とともに国民の勉めるべき価値規準ともされた。それともあれ、伊勢神宮参拝を終えた平田・井上は三重県内を巡察し、御木本とも面会した。その際、御木本は「いくら真珠を沢山に作り出しても、之を日本人に売ったのでは、少しも国益にならぬ、因て主として海外に輸出する方針で、営業して居る」、「漁夫も能くその命令に服して働いて……中には一箇月に五円余の貯金をする様な、心掛の好い者があつて、目下は、八百万個の貝を養つて居る」、「皇族や貴顕の人々が、大勢見物に来られる事があるので、大勢の車夫を軍隊的に訓練して、其時の用に具へて居る」などと語っている。真珠の生産をめくり、人々が一体となつて勤勉・生業に励んでいる様子を御木本は語っているのだが、これは戊申詔書の趣旨とよく合致する話といえよう。

一九〇九年（明治四二）一〇月三日、三重県斯民会が発足した。午前中の発会式では、「君が代」合唱、教育勅語・戊申詔書奉読、篤行者表彰の後、報徳会評議員白仁武の祝辞、内相平田の演説があつた。午後の茶話会では、「劈頭第一に水野内務省参事官の欧米自治談、桑名郡城南村長後藤栄三郎氏の納税、兵役、教育の三大義務に関する談話、師範学校附属小学校の小林、山田両訓導の談話あり。次に別室に於て、阿山郡鞆田村長高島多兵衛、名賀郡視学中山与三郎、尾呂志尋常高等小学校校長永田定次郎、阿波尋常高等小学校長谷口忠次郎、一身田尋常高等小学校長国府佐一郎、三重県四郷村伊藤小左衛門、二見町辻喜代蔵、鳥羽町御木本幸吉諸氏の談話ありて」というように、地域

の名士とともに御木本の「談話」もあつた。ただし、御木本が何を語つたのかは明らかではない。発会式の参会者の中には井上友一もいた。実は、三重県斯民会発足の前日である一〇月二日に伊勢皇大神宮（内宮）の、一〇月五日に豊受大神宮（外宮）の式年遷宮が行なわれた。平田・井上らの遷宮式参列の日程に合わせて三重県斯民会の日取りが決められたことを、井上が述べている。

斯民会は「教育勅語ノ御趣旨ヲ遵奉シテ精神訓育ヲ奨メ広く道德ト経済トノ調和及教育産業ノ発達地方自治ノ作興ヲ期スル」ことを目的とし、その会員は「忠君愛国義勇奉公ノ思想ヲ涵養」し、「至誠ヲ以テ本トナシ勤勞ヲ以テ主トナシ能ク分度ヲ守リ以テ推讓ヲ為」し、「協同一致ヲ以テ公私ノ事ニ当リ立徳致富ノ実ヲ拏ケク相互ニ救済ヲ為」し、「納税其他公ノ義務ヲ重」んずることを規範とすべしとされた。目的の中の「道德ト経済トノ調和」は尊徳の教えでもある。規範の中の「至誠・勤勞・分度・推讓」は報徳思想の四綱領とされている。斯民会は、まさに報徳思想の実践団体としての役割を担っていたのであつた。

一九一〇年（明治四三）〜一九二三年（大正一二）三重県斯民会の第一回〜二回総会の記事が、その都度『斯民』に載っているが、そこに御木本の名は見られない。ただし、明治天皇の追悼特集号には御木本も追悼文を寄せており、その肩書は「三重県斯民会評議員」となっている。三重県斯民会における御木本の地位は決して軽いものではなかつたことが窺える。

三 御木本幸吉の尊徳生誕地整備

寛政二二年（一八〇〇）父が亡くなり、享和二年（一八〇二）には母も亡くなり、追い打ちをかけるように酒匂川

の氾濫にも遭つた、一六歳の二宮金次郎は二人の弟と別れ、伯父の家に引き取られた（前述）。それに伴い、金次郎の生家は西栢山（現神奈川県小田原市）の奥津平兵衛の所有となつて、奥津家へ移築され、一八八九年（明治二二）には柳新田（現神奈川県小田原市）の渡辺儀太郎の所有にvari、再度移築された。金次郎兄弟の離散後、尊徳生誕地からその生家は姿を消していたのである。

そうした中であつて、御木本幸吉は服部北溟なる人物の懇憑によつて、尊徳生誕地の整備に携わることとなる。その経緯について『斯民』誌上に記した服部の文章を見てみよう。

本年の六月九日でした。或機会に、真珠業の御木本幸吉氏に会見したから、談余二宮翁の誕生地が、当今桑畑となり、且縁者の手に渡つて居るから、報徳の根源地として、翁の高徳を千載に伝へんが為め、旧蹟として之を恢復したいとの希望と、又一つには、近來報徳の教へが盛んになつて来たに付ては、遠近篤志家の、翁の誕生地へ参拝する者が多く成つて来た。所が小田原在の栢山を知つて、東海線松田駅在の栢山を知る人が尠ない為めに、道路を迂回する人が多い。其処で松田駅構内に、道標を一基建設したならば、一つは参拝者の便利ともなり、一つは鐵路旅行者に、報徳の因縁を結ぶ動機ともなるであらうといふ考へから、是非永久的な道標を一基建てたいと、此二つの希望を話した。

氏は即座に此偉人の為めに浄財を喜捨する事を諾せられた。予は希望を話したのみであるのに、氏が平素公共の為に尽される精神は、時間でいへば、五分間足らずの中に、相模聖人二宮尊徳翁の誕生地は愈々恢復する事に決した。次いで十一月十五日を以て、土地買入は固より土工一切を終へた。之れは実に桑田変じて我意と成つたのである。

実は恢復一条を斯の如く誌上に発表するのは、真面目なる御木本氏の意に副はない事は重々知つて居る。又氏

は人に知らしめんが為め此挙を取てせられたのではないが、予は情の上から、一日も早く報徳会員諸氏に知らせて喜んで貰いたいのと、主幹国府氏が、他の雑誌等へ告白するのと異なり、左まで御木本氏の徳を累はす事はなからうとの注意もあつたから、其大略を報知するのである。併し恢復中には種々の事情が纏綿して居りました、夫れは夫れとして、次号に於て詳細の事を報告しよう。

すなわち、一九〇九年（明治四二）六月九日、服部北溟は御木本と会見した際、尊徳の生誕地が桑畑となり、地所が縁者の所有となつていたので、旧跡として回復したく、また、生誕地への参拝者が増えたので、東海道線松田駅（当時の東海道線の国府津→沼津間は現在の御殿場線のルートにほぼ相当する）構内に道標を建てたいと希望を述べた。御木本は即座に費用の提供を承諾し、一月一日には土地の買入れはもとより、工事の一切を終えた。右に引用はしなかつたが、服部によれば、整備された土地は総計二五九坪で、全体に平均二尺五寸（約七六cm）土盛りをして、一面に「稚松」が植えられた。松田駅構内の道標は御影石製で高さ八尺（約二m四二cm）、台座の高さ三尺（約九二cm）、台石の厚さ一尺（約三〇cm）。碑の正面には「二宮尊徳翁誕生地栢山道 約一里半」と刻まれている。服部は御木本の意には沿わないであろうことは承知の上で、尊徳生誕地の回復、道標の建立は御木本が私財を投じて為したものであることを、「二宮尊徳翁誕生地恢復成る」と題して『斯民』誌上に公表したのであつた。道標は現存するが、建立者御木本幸吉の名は碑面のどこにもない。なお、引用文の末尾に、尊徳生誕地の整備中に起きた種々の事情については、次号において詳細に報告するとあるが、次号を含め、以後の『斯民』誌上に関連する記事は見当たらない。その理由は不明だが、事に依ると、御木本が続報の掲載を承知しなかつたのかも知れない。

服部北溟には『二宮尊徳報徳講話』（杉本書房、一九〇九年（明治四二）六月二五日発行）、『青年修養 報徳之実践』（良明堂、一九一〇年（明治四三）九月一〇日発行）、『尊徳翁と報徳主義』（太陽閣、一九四一年（昭和

一六（一〇月一五日発行）などの著作がある。の自序には、約三〇年以前に栢山を訪れた際、尊徳の生家はなく、敷地も人手に渡つて畑になつていた情景を見て、御木本に遺跡の保存を願つたところ、御木本は即座に快諾し、生誕地が回復したが、自分が報徳に関する著書を出版したのも、それと同じ年であつたと記されている。生誕地回復と同年に出版した著書とはのことである。すなわち、服部はの出版に関連して尊徳の生誕地を訪ね、その状況を目の当たりにしたため、の発行日（六月一五日）の直前（六月九日）御木本に会つた折、生誕地の回復などを頼んだといふことにならう。

なお、生誕地は一九一〇年（明治四三）一月、御木本から報徳会へ寄贈されている。

御木本による生誕地整備という出来事は波紋となつて広がつた。当時、静岡県掛川所在の大日本報徳学友会は一九〇九年（明治四二）一二月三日発行の会誌に、御木本の「義拳」と服部の「幹旋」とによつて保存が成つた尊徳生誕地に、「旧蹟の由緒」と「恢復の來歴」を記した記念碑一基を建立するための募金広告を掲載した。募金広告は東京家庭学校長留岡幸助、斯民主幹国府種徳、新潟積善組合主事林静治、報徳学訓導山田猪太郎の連名によるもので、その本文は左のとおりである。

一宮尊徳先生の誕生地たる神奈川県足柄上郡桜井村栢山の旧蹟は、久しく桑園菜圃のまゝに委せられ、故古橋源六郎翁をして生前に必ず同志の力を以て此地を恢復せざるべからずと慨歎せしめたる所なりしに、果然として今回三重県御木本幸吉氏の義拳と服部北溟氏の幹旋とに依り、明治四十二年十一月十五日、即ち古橋翁の歿せられし後三日を隔て、該地の買入れ並に土工の一切を了り、報徳の発源地に対する遺跡保存の設備、茲に始めて完了を得たり。是れ独り古橋翁の地下に雀躍すべき所たるのみならず、又実に一般諸同人の慶祝して措かざる所なり。旧蹟の保存は、此の如くにして一段落を告げたり。然れども之れに附帯して更に望外の一事をいはず、旧蹟

の由緒、及び之が恢復の來歴を誌して、永遠不朽に伝へんが為め、誕生の遺蹟地に記念碑一基を建設することはなり。此の如くにして一は先生の洪徳を後世に伝へ、一は聊か恢復者の篤志に酬いんことを期す。吾等揣らず敢えて其衝に当らんことを此際広く大方諸彦の賛襄を得て此目的を達せんとす幸に吾等の計畫を扶けて、斯道の為め、心分の醜金を吝まず吾等をして完成を告げしめられんことを懇囑す。

右の募金広告の中に名前の挙がる古橋源六郎とは、愛知県北設楽郡稻橋村（現愛知県豊田市）の豪農で、尊徳の高弟富田高慶・斎藤高行と並んで「天下の三篤農」と称された六代目古橋源六郎暉兒の子・七代目源六郎義真のことで、「三河尊徳」と綽名された人物であった。その七代目古橋源六郎が尊徳生誕地の「恢復」を志しながらも果たし得ず彼の死後、「三日を隔て」て、御木本がそれを全うしたというのである。ただし、七代目古橋源六郎が没したのは一九〇九年（明治四二）一月三日であり、御木本が尊徳生誕地の整備を完了したのは同年同月一日であるので、「三日を隔て」という募金広告の記述は正しくない。それはともあれ、七代目古橋源六郎と御木本幸吉あるいは服部北溟との間に、尊徳生誕地整備をめぐる何らかの連絡があつたのか否かは、今後究明すべき課題である。

さて、この募金に応じた者の中に香川県立丸亀高等女学校があつた。生徒による三四円七七銭五厘と職員による五円八二銭の寄付金が報徳会へ送られたのである。一九四名の生徒はそれぞれ、俵約ノ結果二依ルモノ百名 裁縫ノ結果二依リシモノ六十六名 家事ノ手伝ノ結果二依リシモノ三十八名 麦稗及経木真田ヲ編ミシ結果二依リシモノ三十一名 間食ヲ廃セシニ依リシモノ四十五名 団扇編ヲ為セシニ依リシモノ四名 其他十名」といった方法によって金銭を得、最高額八〇銭、最低額四銭、一人平均一一銭九厘を拠出したという。麦藁や経木を真田紐のように平たく編んだ麦藁真田や経木真田は夏帽子などの材料になるが、香川県の特産品であつた。

丸亀高等女学校などが募金に応じた記念碑「二宮翁誕生遺蹟之碑」は一九一五年（大正四）八月、中央報徳会に

よつて建立された。建碑の経緯を記した「二宮翁誕生遺蹟記念碑成る」と題する中央報徳会の報告文を左に抄出した。
い。

本会の有志乃ち碑を建て翁の遺蹟を顕彰せむことを謀りしに、各地篤志の士争ふて醸金を寄せ、女学校生徒及小学児童の之に応じたるものも亦尠からず。仍て本会は建碑工事一切を相州箱根湯本なる福住九蔵氏に委託し、翁の遺族たる二宮長太郎氏、並に小田原報徳神社宮司草山惇造氏等の協力の下に此程建碑工事全く竣成せり。本号の口絵に掲げたるもの即ち是れなり。篆額は本会評議員たる内務大臣一木喜徳郎博士 当時の文部大臣 の筆に成り、碑文は同じく本会評議員たる犀東国府種徳氏の撰に係る。此に建碑の由来と其の竣工及収支決算を報告し、深く寄附者諸氏の厚意を感謝す

右の報告文の後に「二宮翁誕生遺蹟建碑会計報告」が掲げられている。すなわち、費用総額二六二円三一銭のうち一八六円五七銭は丸亀高等女学校ら有志の寄付金、残りの七五円七四銭は中央報徳会の負担によるものであつた。右の報告文で、中央報徳会から建碑工事一切を委託された福住九蔵とは、尊徳の高弟福住正兄（十代目九蔵）の子・政吉（十一代目九蔵）である。正兄は、尊徳を祭神とする報徳二宮神社の創建に奔走するが、神社の完成を待たず、一八九二年（明治二五）五月二〇日に没する。また、協力者の二宮長太郎は栢山の二宮本家の当主であり、草山惇三は小田原の報徳二宮神社第二代宮司である。報徳二宮神社や栢山二宮家の関係者が建碑に携つたのであつた。なお、碑は尊徳生家に向かつて左手に現存する。

御木本によつて整備され、中央報徳会によつて記念碑も建立された尊徳生誕地であつたが、関東大震災で被害を受けてしまふ。御木本は再び、生誕地の回復に乗り出すが、そのことは『斯民』に「二宮翁誕生遺蹟と御木本氏」と題する無記名記事として紹介された。左にそれを抄録する。

相州桜井村栢山なる二宮翁の誕生地跡は久しく桑園菜圃のまゝに委せられてゐたが、真珠の養殖を以て知られたる御木本幸吉氏大に之を憾みとし、皆を出して此地を購ひ、且つ樹を植え柵を繞らす等相当の設備をなし、挙げて之を本会に寄附して永久に保存の道を講ぜられた。ことは十数年前に屬するが、同地は一昨秋の大震災の爲め、周囲の石柵悉く倒壊し、記念碑も亦斜傾する等の被害ありたるを以て、御木本氏は更に其修理を企てられ、去る三月二十二日午後、忙中の寸閑を以て令息と共に実地の検分に赴かれた。本会よりは留岡理事並に上野、近江両幹事行を共にした。翁の遺族たる二宮長太郎、二宮兵三郎両氏を首め、同村吏員有志諸氏に迎へられた一行は、先づ詳しく其実状を踏査した後、御木本氏より、之が修理に要する工費は悉く寄附するのみならず、更に翁の遺蹟を顕彰する爲めに種々考慮しつつある旨を述べられた。是等はいづれ遠からず実現さるべく、其機会に於て発表することゝする。一行は残雪斑々たる函嶺の彼方に落とす夕陽に照されつゝ記念の撮影を終り、更に車を急がせて小田原城趾なる報徳二宮神社に詣でた後、帰京の途に就いた。因に近く起工さるべき小田原急行電鉄は同地付近を通過する予定であるといふ。

すなわち、一九二三年（大正一二）九月一日の関東大震災によつて尊徳生誕地を囲む「石柵」がごとごとく倒壊し、記念碑も傾斜してしまふ。そこで、一九二五年（大正一四）三月二日、御木本は息子（長男隆三、当時三二歳）や中央報徳会理事の留岡幸助らとともに被害状況検分のため、生誕地を訪れる。二宮本家の長太郎や、尊徳の弟三郎左衛門の末裔兵三郎らに迎へられた御木本は、修理費用全額の寄付を申し出るとともに、尊徳の遺蹟を顕彰するために種々考慮中である旨を伝えた。この記事は誌面の一頁にちょうど納まるが、頁の左上方には御木本と留岡の二人が並び立つ写真が、下方には御木本を中心に、息子の隆三、留岡ら中央報徳会の役員、尊徳の子孫、栢山村の吏員など計一一名が横一列に並んだ写真が掲載されている。当日撮影された記念写真なのである。記事には、小田急線の敷設

工事が近く始まることが記されている。小田急線の新宿―小田原間は一九二七年（昭和二）四月一日に開通する。尊徳生誕地は小田急線の線路からは直線距離で一〇〇mほど東に位置している。そのすぐ西側には小振りのビルが建つものの、移転復元された尊徳生家の茅葺屋根の一部分は、現在でも小田急線の車窓から垣間見ることが出来る。近い将来、東京からの客を乗せた電車が尊徳生誕地の間近を通過することになるといふ情報は、御木本らに尊徳生誕地の再復興を思い立たせる一要因になったとも考えられる。

震災を受けた尊徳生誕地の修理に関しては、実現した折に発表すると、右の引用文中にはあるが、『斯民』誌上にそうした記事を見出すことはできない。それゆえ、修理の経過は不明だが、翌一九二六年（大正一五）一〇月一七日、栢山報徳社主催の尊徳七十年祭が約一五〇名の来会者を得て、生誕地にて挙行されたこと⁽¹⁾から鑑みて、それ以前に修理は完了していたものと思われる。

四 御木本幸吉以後の尊徳生誕地・道標

前述のごとく、御木本幸吉は一九五四年（昭和二九）九月二日に亡くなる。以下では主に、御木本没後における尊徳生誕地および道標をめぐる動きを追ってみたい。

一九三四年（昭和九）二月二日、生誕地敷地は中央報徳会から小田原町（当時）へ永久無償貸与された。戦後の一九五三年（昭和二八）七月二日、尊徳を顕彰すること、生誕地を訪れる人々のための総合的施設を建設することを目指して、尊徳記念館建設期成会（会長は神奈川県知事、副会長は副知事・県教育長・小田原市長、顧問は衆参両院議長・関係大臣・大日本報徳社関係者ほか）が結成された⁽²⁾。一般への募金活動も積極的に展開され、一九五五年

(昭和三〇)一〇月一九日生誕地のすぐ南側に宿泊施設を伴う尊徳記念館が落成、翌二〇日には同所で尊徳没後百年祭が挙行された。⁽¹¹⁾

尊徳生家(三一・三五坪)は小田原市柳新田の渡辺善太郎氏の住宅となっていたが、尊徳記念館建設期成会が一九六〇年(昭和三五)九月二〇日、生誕地に移転復元し、小田原市へ寄贈した。一九六三年(昭和三八)三月五日、生家は一八世紀足柄平野の中規模農家の典型であるとして神奈川県重要文化財に指定された。⁽¹¹⁾この尊徳生家については、「何回かの移建のためその都度かなりの改造をつけ、特に背面通りは柱まで全部取替えられていた。しかし梁組は建築当初の材料がほぼ完存していたので、これによって全体の規模や柱の配置が確かめられ、柱間装置など不明の箇所は類似例を参考にして復元的に整備されている」という。⁽¹¹⁾

生家が生誕地に復元された一年後の一九六一年(昭和三六)九月三〇日、中央報徳会は生誕地を小田原市へ寄贈した。

その後、尊徳没後一一〇周年を記念して、一九六五年(昭和四〇)九月、尊徳遺品陳列館が尊徳記念館の隣に建設された。さらに、尊徳生誕二百年祭が催された翌年の一九八八年(昭和六三)五月二二日、尊徳記念館・遺品陳列館に替わる新尊徳記念館が竣工し、六月一日に開館した。同館は尊徳についての学習の場として、また広く社会教育の場としての機能を有している。

一方、松田駅構内の道標は、前述したように小田急小田原線(新宿～小田原)が一九二七年(昭和二)四月一日に開通し、東海道本線が一九三四年(昭和九)一月二日の丹那トンネル開通に伴って国府津から熱海へまわる路線に変更したことで、徐々にその存在を忘れられていった。松田駅は東海道線の駅から、同線の支線・御殿場線の駅へと、その地位が変化したのであった。

J R 御殿場線松田駅が所在する神奈川県松田町は二〇二二(平成二四)年度、松田駅北口にポケットパーク(約一〇m)を作り、そこに御木本建立の道標を移設し、少年金次郎像を新設するために、当初予算案に七〇〇万円を計上した。これは「観光資源としての掘り起こしが狙いで、(中略)併せて尊徳の生家跡がある小田原市栢山までの道のりを散策路として整備する」というもので、「散策路は御木本が歩いた『栢山道』を見直し、案内看板の設置やパンフレットの作製などを計画」しており、「JR松田駅から小田原市栢山までの約六kmのうち、松田町内のルートを整備する」としている⁽¹⁾。その工事は予定通りに進み、二〇二二年(平成二四)一〇月二九日に、移設された道標と新設された金次郎像の除幕式を行なった。これによって、御木本建立の道標が再び多くの人の目に触られることとなり、尊徳生誕地へ至る散策路の起点としての体裁が整えられたと新聞は報じている⁽¹⁾。

おわりに

前述のごとく、一九〇九年(明治四二)六月九日、服部北溟の依頼を受けた御木本は一月一五日には尊徳生誕地の買入れと整備、ならびに松田駅構内の道標建立の一切を完了した。その間の一〇月三日に三重県斯民会が発足している。日露戦争後、半官半民の組織である(中央)報徳会の設立などによって、報徳運動は国策との連携を強めていく。その(中央)報徳会の下部組織である三重県斯民会の評議員であった御木本の尊徳生誕地整備も、そうした当時の報徳運動の延長線上に位置付くという一面を有するものであるという見方もできよう。ただし、御木本の尊徳生誕地整備と、三重県斯民会の設立とが具体的に如何に結びつくのかは、今後追究すべき課題である。

そもそも、御木本にとって尊徳生誕地整備の目的は那邊にあったのだろうか。例え、尊徳の業績や教えに感銘を受

けていたとしても、それだけで、生誕地整備に私財を投ずる全面的な理由とはなるまい。ここに、そのことを考えるための材料となる証言がある。それは井上友一の証言である。前述したことだが、井上は内務省神社局長として一九〇八年（明治四一）一〇月下旬、平田東助内務大臣とともに三重県内を巡察した際、御木本が地域を挙げて真珠の養殖業に励んでいることを、本人の口から聞いた人物で、その翌年の三重県斯民会の発会式にも参列していた。井上は、尊徳の没後六〇年の祭典が執行された一九一六年（大正五）一〇月二二日、二宮家の菩提寺である栢山の善栄寺で開かれた足柄上郡主催の地方改良講演会にて講演を行なった。その講演録「再び二宮翁の墓に詣で」の一部を左に掲げる。

それから今一つ申上げたいのは、先生の御生誕地のことである。此の遺跡が、見らるゝ通り立派に保存されたのは、御木本幸吉氏の篤志に依るのである。氏が此の志を起されたのは、曾て氏は伊勢松坂町に在る、本居宣長先生の書齋を保存したことがあつて、其の経験に依つて、由緒ある名所旧跡の保存と云ふことは、世の為に頗る結構であると悟り、何か他に適当な所もがなと探して居られる際、丁度此の地のことを聞かれて、是非尽力したことから、私の会へ相談に来られた。そこで私の方では大に喜んだが、尚全国の子女をして、此の美拳を助けしめたいと思ひ、全国から寄附を募つたのであるが、奈良県の桜井高等女学校を始め、和歌山徳島等の諸県の小学校からの申込があつて、今日の如く立派に保存される様になつた次第である。

井上の講演によれば、御木本は「郷土の偉人」ともいえる本居宣長の書齋を保存した経験から、由緒のある名所旧跡を保存することは、世のためにたいへん良いことであると悟り、他にも適当な場所はないだろうかと探していたところ、尊徳生誕地のことを聞き、（中央）報徳会に相談したといつのである。由緒ある名所旧跡の保存が、なぜ世のためによいことなのかは、これだけでは分からないが、御木本にとっては、本居宣長の書齋を保存した経験の延長線

上に尊徳生誕地の整備が位置付けられていたようである。第三節で、服部北溟が御木本に尊徳生誕地の整備などを依頼したことを述べたが、その経緯を記した服部の文章の中に、御木本について「氏が平素公共の爲めに尽される精神」と評するくだりがある。⁽¹⁾ 御木本にとって、尊徳生誕地の整備は「世の爲」「公共の爲」なのであった。なお、井上の講演録には、御木本の「美拳を助け」るために「全国から寄附を募った」ところ、高等女学校や小学校から「申込」があったとあるが、これは、前述したところの、御木本による整備完了後の尊徳生誕地に記念碑を建立する際の出来事である。井上の講演録では、尊徳生誕地の整備にあたって「全国から寄附を募った」ように読めるが、桑畑になつていた生誕地を整備した際の費用は一切、御木本が支出したことは前述のとおりである。御木本による尊徳生誕地の整備と、その地への記念碑建立という二つの出来事を井上、あるいは講演録の筆者が混同してしまつたのである。

ところで、前近代に活躍した歴史上の人物で、その生家がもとの場所に現在も建つ例は決して多くはないであろう。今、私たちは尊徳の生誕地を訪れることで、彼の生育過程や人物像、当時の社会状況などについて、文献を読むのは違ふ形で、さまざまに思いをめぐらせ得る環境に浸ることができる。また、地元の自治体も社会教育の充実や地域振興などの観点から、遺跡（生誕地・道標）を活用した施策に取り組んでいる。これらは御木本の行動、すなわち生誕地の整備、道標の建立という事実が基礎となつて生まれた現象なのであった。

注

(1) 大林日出雄『御木本幸吉』吉川弘文館、一九七一年。御木本真珠発明一〇〇周年史合同編纂委員会『輝きの世紀』同編纂委員会、一九九三年。

- () 村松敬司「日本近代産業の指導者と報徳」二宮尊徳生誕二百年記念事業会報徳実行委員会編『尊徳開顕』有隣堂、一九八七年、三一六―三二七頁。
- () 関田昇「尊徳誕生地を訪れた御木本幸吉」『史談足柄』四四集、足柄史談会、二〇〇六年、五三―五四頁。
- () 佐々井信太郎「解題」佐々井典比古訳注『補注報徳記(上)』一円融合会、一九五四年、五頁。
- () 佐々井典比古「解題」佐々井典比古訳注『訳注二宮翁夜話(上)』一円融合会、一九五八年、一〇頁。
- () 由井正臣「序論 統治機構の確立と『国民組織』化」鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統治と抵抗 二』日本評論社、一九八二年、三八頁。
- () 酒田正敏「解題」『雑誌「斯民」目次総覧』内政史研究会・日本近代史料研究会、一九七二年、一―四頁。金澤史男「解説」『「斯民」目次総覧』新版、不二出版、二〇〇一年、三―五頁。山本悠三『近代日本の思想善導と国民統合』校倉書房、二〇一一年、一六―二七頁。
- () 『「斯民」三編一―一〇号、報徳会、一九〇八年、一九頁。
- () 『「斯民」四編一―一〇号、報徳会、一九〇九年、八六―八七頁。
- () 『「斯民」四編九号、報徳会、一九〇九年、七四頁。
- () 『「斯民」三編五号、報徳会、一九〇八年、七七頁。
- () 『「斯民」七編七号、中央報徳会、一九一二年、目次・八四―八五頁。
- () 『「斯民」四編一―一〇号、報徳会、一九〇九年、七六―七八頁。
- () 『「斯民」四編一―一〇号、報徳会、一九一〇年、四二頁。
- () 『大日本報徳学友会報』九一―一〇号、大日本報徳学友会、一九〇九年、五〇―五二頁。
- () 『国府種徳』古橋源六郎翁『愛知県北設楽郡農会、一九一二年、九八―一一五頁。
- () 『「斯民」五編四号、報徳会、一九一〇年、八〇頁。

- (1) 『斯民』一〇編八号、中央報徳会、一九一五年、六九頁。
- (1) 『斯民』二〇編五号、中央報徳会、一九二五年、六五頁。
- (11) 『斯民』二二編二二号、中央報徳会、一九二六年、六三頁。『大日本報徳』二九四号、大日本報徳社、一九二六年、二五、二七頁。
- (1) 小田原市編『小田原市史 通史編 近現代』小田原市、二〇〇一年、六九七頁。
- (11) 中野敬次郎『復刻版 小田原近代百年史』八小堂書店、一九八二年、七〇七頁。
- (11) 小田原市教育委員会編『小田原の文化財』小田原市教育委員会、一九八九年、五八、五九頁。
- (11) 神奈川県教育庁指導部文化財保護課編『神奈川県文化財図鑑 建造物篇』神奈川県教育委員会、一九七一年、一五三頁。
- (11) 『神奈川県新聞』二〇二二年一月一六日付。
- (11) 『神奈川県新聞』二〇二二年一〇月三〇日付。
- (11) 『斯民』一一編七号、中央報徳会、一九一六年、七六頁。
- (11) 『斯民』一一編九号、中央報徳会、一九一六年、三四頁。
- (11) 『斯民』四編二二号、報徳会、一九〇九年、七七頁。